The Japan Society of Educational Sociology

■ 書 評 ■

永井聖二・古賀正義［編］

『《教師》という仕事＝ワーク』

茨城大学 小島 秀夫

本書のテーマは「学校という制度の疲労と学校知への懐疑の深まるなかでの，教師の仕事の変容とその展望」(14頁)ということである。本書を読んで感じることは，編者とそれ以外の若手研究者の教師研究に対するスタンスのちがいである。その差はたとえば，編者が担当している論文はすっと読めるが，若手研究者の論文は難解であり読むのに苦労するといったような点である。また「学校知」に対する懐疑の程度の差が編者と若手研究者の間に存在しているように思われる。以下，各章の内容を紹介しコメントしていくこととする。

第1章では，小・中学校において実施される「総合的な学習」によって，これまでの教師の役割が変化するし教師像も変化するであろうことが論じられている。ここでは「総合的な学習」が理念どおりうまく機能した場合が述べられているが，今後の課題としてはどのように教師の役割が変化し教師像が変化したのかを検証することが必要であろう。第2章はインターネットなどによる学習を扱ったものであり，今後は重要な研究テーマとなるであろうが，現在のところは学問的な蓄積はなされていないと思われる。

第3章は小学校におけるエスノグラフィックな調査による研究の成果が紹介されている。「理想の教育の実現」のために教師がとる「ペダゴジカル・ストラテジー」としての5つの「振る舞い方」が紹介されている。この「振る舞い方」の分析はなるほどと思わせるものであるが，教師のそれらの行為に与える意味づけを筆者の枠組で解釈しすぎているのではないかという印象を受ける。

第4章の論文は本書の中で最も難解な論文である。筆者は「ナラティヴ・アプローチというような認識のスタンスは，たとえば教育の実践家にも理論家にも，自らの社会的行為に関する自省や批判という方法的自覚をもたらしてくれるところに，その意義を見いだすことができるのである」(96頁)として，教育世界のナラティヴ的構成について説明している。学級崩壊や「いじめ」についてもナラティブ的視角を導入している。しかしながら，こうした視角をとった結果が，これまでの視点とはこうした点が異なっているということが明示されていないという不満を評者は感じる。

第5章は他の章とは性格をやや異にする論文である。ここではこれまで教育社会学ではあまり問題にされることのなかったカウンセリング（マインド）が扱われており，授業場面と保健室における教師と生徒のやりとりが分析されてい

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

る。第6章においては，いくつかの教師論の整理がなされその問題点が指摘された後に，教職の第3の改革の方向性が示されている。教師論と専門職論の整理はうまくなされていると思われるが，しかしながら，これからの専門職に必要なことの1つとして「専門知識や専門家の実践を生活者としての市民の“声”や公共的な討論の場（政治的次元＝批判理論）へと開くこと」（159頁）が挙げられている。このことは確かに必要なことではあるが，たとえば100人の保護者とともに教師がそうしたことを実践した場合には，専門職の確立どころではなく，専門職の崩壊にもつながりかねない危険性があるように感じられる。

第7章では教師文化や教師の職業的社会化が説明され，若い教師に対して社会化の枠を超えて学校のイノベーションを担うことに対する期待が述べられている。いずれもこれまで教育社会学で多く議論されてきていることである。これに対して第8章では比較的新しい問題が扱われている。ここではジェンダーの視点や「隠れたカリキュラム」が論じられ，それらによってもたらされる男女差別などが問題とされている。本章での議論ももっともであると思いはするが，「教師がまず自覚すべきことは，気づかないうちに教師自身が性役割のモデルになっていることである。（中略）必要なことは社会化過程において『女』／『男』に育てられた自分にとって，知の体系はどのように見えているのか，また知の世界へどのようにアクセスしているのかという点を吟味することである」（206頁）といった文章に出会うと，議論が抽象的すぎて多少はジェンダーのことも勉強したことのある評者でも，どうすればよいか困惑してしまう。第9章では生涯学習社会の中の教師モデルが論じられており，終章は本書のまとめとなっている。

本書は教師研究における若手研究者の関心やアプローチの方法を知る上で良い情報源となっていると思われる。今後の教師研究にこれらの若手研究者の与える影響は大きいであろう。

最後に，教師研究について評者が感じている期待を述べておくこととする。その第1は，教育社会学においてもかつてやられていたことがある授業分析の研究成果と現在の研究をどのように関連づけるのかという作業がなされる必要があろう。最近の教師研究では，実際の教室内の教師と生徒の相互作用が分析されるようになっているのが特徴であるが，授業分析の成果には注目がなされていないようである。最近の研究が授業分析とはどこが同じでどこがちがうのかの吟味を行う必要があろう。

第2は，本書の第3章に示されているような教師のストラテジーが教師の経験年数によってどのように変化するのかといったことが解明される必要があろう。現在使われているストラテジーが同一の教師の中でどのように変化していくのかを知ることは興味のある点である。現在エスノグラフィックな調査に協力いただいている先生の5年後あるいは10年後の変化を調べるということは非常に重要であると同時に研究の内容も深化させるであろう。

◆四六判　242頁　本体2,200円
学文社　2000年9月刊

NII-Electronic Library Service